

利害一致婚のはずですが、
ホテル王の一途な溺愛に
蕩かされています

みなつき堇

Sumire Minatouki



Eternity
BUNKO

目次

利害一致婚の**はず**ですが、
ホテル王の一途な溺愛に蕩かされています
記念日の過ごし方

257 5

書き下ろし番外編

六年後の大道寺家

327

利害一致婚のようですが、
ホテル王の一途な溺愛に
蕩かされています

プロローグ

この夜から、すべてがはじまった。

勇気を振り絞って異国にやってきた夜、まさか、こんな出会いがあるなんて――

「――咲笑」

シンガポールの夜景が一望できるスイートルームの一室。

甘いキスをしながらもつれ合うように部屋を移動し、美しい夜景をゆっくり眺める暇もなくベッドに押し倒された。

つい先程、魅力的な「利害一致婚」を提案してきた彼は、マットレスの上で跳ねる体を縫い付けるようにして素早く覆いかぶさってくる。

「優さん……」

紳士的だった彼の、優美な獣のような姿。じわりと体中の熱が下腹部に集まるのがわかる。

「今夜から覚悟してね。俺しか見られないようにしてあげるから……」

それを合図に、彼は再び性急なキスを仕掛けてきた。ひとつひとつ衣服を剥がし、情熱的に素肌に触れていく。

ベッドルームに密やかに響く、ふたりの荒い息遣い。

昨日までの失恋の痛みが嘘のように霧散し、心も体も甘く溶かされていく。

数時間前まで、婚活パーティーで「同じナンバー」を持つ、ただの参加者同士だった。会場で言葉を交わしたのはほんの少しだけ。

それも、私たちは初対面だった。なのに、なぜこうなってしまったのか。

偶然？ それとも、運命？

私にもわからない。でも、もうどっちだっていい。

彼という極上の男性に魅了されてしまったから。

好きでもない人と結婚させられるくらいなら、たとえどんな形であろうと彼のそばにいたい。

彼のこと——優さんのことが、好きだから。

これからの未来に甘い予感を抱きながら、でもかすかに頭の片隅に存在する戸惑いから視線をそらしながら、与えられる念入りの愛撫を貪欲に受け入れる。

「あぁっ……んっ、優さん……」

「たまらないな……。今すぐあげるよ……。早く俺のものになって――」

恥じらいながら熱を求めたその瞬間、グズグズに溶けていた体が一気に大きな質量でえぐられ、目の前で閃光が走ったかのようにチカチカした。

「ああんっ……!!」

「……くっ」

振り子のように、リズミカルに激しく雄根を打ち付ける彼。私はその背中に固く腕を巻き付け、与えられる快楽を余すことなく享受した。

「あつ、んあ……ああつ、は……」

「……可愛い声をもっと聞かせて。俺のものだって、思い知らせて……咲笑」

——出会ったばかりの理想的な王子様。

彼の気持ちも、この先に待っている未来も。まだなにも予想がつかない。

けれども私は決めたの。

彼との結婚に賭けるって。幸せになりたいから。

薄れゆく意識の狭間で何度もキスを交わし、体を絡ませながら、私たちは甘い快楽の海に沈んでゆく——

第一章 婚活パーティーと花火と理想の王子様と

ことのはじまりは、およそ一ヶ月前。まだ雪のチラつく二月の頃。

その日、私はとある二度目の精神的ショックをお酒で緩和していた。

「もう。だからあいつはやめておいたほうがいいって言ったのに……。女好きだし調子いいし、ろくなことにならないって言ったじゃない」

「だって、結婚しようって言ってくれてたんだよ……?」

「本気なら他の人と子供作るわけじゃないでしょう。相手はもうすぐ安定期らしいわよ」再び現実を突きつけられて、さらにブワッと悔しさがあふれる。

居酒屋のカウンターに突っ伏しておいおい涙を流すと、親友で幼馴染みで同僚という長い付き合いの瀬谷みゆきが、間もなくやってきたビールと枝豆を勧めてくれた。

周囲からちくちくと視線を感じるけど、今夜くらいは泣かせてほしい。

——私、小道咲笑、二十五歳は、三年間付き合っていた彼氏、井上友樹と一週間前に破局した。そして本日の終業後、同じ部署の仲間とともに、後輩との結婚報告を受けたところだ。

「今日はどこん付き合うから元氣だして。あんな女好きなんて別れて正解よ。咲笑にはもつと素敵な人がいるって」

「うう……」

ようやく前向きになれそうだったのに……！ 悲しいというよりは、悔しさでいっぱいだった。

トモキは同じ大手化粧品会社T & Yの国際事業部の同期で、入社してすぐに彼からアブローチを受けた。

『咲笑ちゃんかあ、可愛いね』

新入社員歓迎会だっただろうか。可愛いなんて言われるのも、テーブルの下でこっそり手を握られるのも初めてで。まったく男性と接点のなかったうぶな私は、甘い言葉と熱烈アブローチにほだされて、すぐに彼と付き合いました。

——けれども。

『オレ、もう咲笑とは付き合えない』

一週間前、彼はそう言って三年間に呆氣なく終止符を打ったのだ。

まさにどん底に落とされた気分だった。

もちろん、みゆきの言う通り、女の子の影があつたかと聞かれると否定できない。っていうかいいと思う！

けれどもそのたびに私たちはどうにか問題を解決して、気持ちを確認合ってきた。結婚しようというセリフも信じて疑わなかった。

なのに、それがどういうわけか。同じ会社の、同じ部署の、それもビッチビチの新入社員と授かり婚するなんて、私との関係は彼にとって暇つぶしのようなものだったのかもしれない。

あまりのショックで、大学卒業から三年間お世話になった国際事業部の部長に、今月いっぱいでの退職届を手渡し、同じビルの美容部員のみゆきに電話をして……。涙を堪えながらここまでやってきた。

気弱な私は、元カレ夫婦と同じ会社に留まる精神力なんか持ち合わせていない。

「やっぱ男の人は若くてキャピキャピ元氣で可愛いほうがいいのかな……」

新しい恋人（いや、私が浮気相手かもしれないけれど）と終始イチャコラしていたトモキを思い返し、ふいにつぶやく。

するとみゆきの手元のグラスが、カランと大きく音を立てた。

「そんなことないわ。男を間違えただけよ。咲笑はもう少し自分に自信を持って。私は奥ゆかしくて清純派の咲笑の可愛さに憧れてるんだから。井上と付き合う前の頃とか、まさに無垢な美少女って感じで可愛かったのに」

少し酔いが回っているのか、飛んできたのは盛大なお世辞だ。

「そんなわけないでしょ……」

あまり大きくはない、こぢんまりした二重^{ふたえまぶた}瞼。高すぎない平凡な鼻。

今はダークブラウンの緩いパーマをかけたボブヘアだけれど、トモキと付き合うまではカラーリングもしたことがない、日本人形みたいな髪型だった。

みゆきが奥ゆかしいなんて言ったのは、素朴な外見と、たぶん、言いたいことをうまく口にできない引つ込み思案な性分のせい。

私からすれば、大きな猫目が印象的な、正統派美人のみゆきのほうが羨ましい^{うらやましい}。

私なんて、ただ地味なだけなのに。

なんて思いで、整った顔をじーっと見つめていると、

「——それで、おばさんには、破局したこと言ったの？」

こともあろうに、私が一番恐れていた話題を持ち出してきた。

思い出したくなかったのに。

涙と鼻水が一瞬にして冷める。

親友でもある彼女とは、五歳からの付き合いだ。実家の隣の豪邸に住む、T & Y 役員の両親を持つお嬢様がみゆきだった。もちろんここに入社したきっかけも、みゆきに誘われたからだ。

これまでずっと一緒に、うちの家庭内事情を熟知している彼女の一言に、私は動揺し

て目をそらした。

——まずい、どうしよう。とりあえず心を落ち着かせるために、ジョッキに残るビールを飲み干し、喉を潤^{うるお}す。

「言ってないのね」

それだけで伝わる彼女はさすがだ。みゆきは焼き鳥をつまみながら苦笑い。

「言ってない。言えるわけないよ……」

両手で顔を覆い大きく息を吐く。言葉にすると、改めてことの重大さを理解し憂鬱^{ゆううつ}になる。

考えないようにしていたけれど。

——そう。私には、困っていることがある。

それは、私の結婚を今か今かと待ち詫^わびる、極度の心配性の母がいることだ。

『引つ込み思案の咲笑は、将来が心配よ！』が口癖で、近年は顔を合わせるたびに『彼氏との結婚はまだなの？』『見込みがないなら、友達の息子さんと会ってみない？』と言ってくる母。

トモキと交際しているにもかかわらず『咲笑の写真を見せたら気にいってるの』と勝手に私の写真を友人の息子さんたちに見せて回ったり、『とりあえず会わない？』と何度も会わせたがったりするのだ。

長年大手企業の敏腕営業職だったのもあって、友人関係が広く、とても社交的。持ってくる写真の数は数え切れない。

口下手でおっとりした私や父が敵うわけもない。ふたつ下に出版社勤めの弟がいるが、『ネタだ』とおもしろがるだけ。つまり家の中は母の独裁政権状態。別れたなんて知られたら、大変なことになる……！

「今までは『彼氏がいるから』ってどうにか逃れてきたけど、次に帰るときは厳しいかも……。勘と尋問がすさまじくて……」

「嘘がつけなくて押しに弱い気弱な笑みには、おばさんの追及をかわすのは難しいだろうね。しかも来月おばさんの誕生日じゃない。どうするの？」

「——っぐう」

思わず唸った。

両親の誕生日は実家で過ごす。これは弟が社会人になった去年からの約束だ。家族が揃う機会も少なくなってしまったため、両親はこのイベントを非常に楽しみにしている。でも、察しのいい母に会えば、破局したことがバレるのは確実だ。そうなれば、あれよあれよという間に『本日は、お日柄も良くオホホ！』なんて事態に発展しかねない。そうなれば式まで強引に一直線……

ああ！ やだやだ！ 人見知りなのに、知りもしない、ましてや母の選んだ男性とお

見合い結婚なんて、絶対無理だ！

「はあ……どうしよう、みゆき。失恋の傷も癒えないまま、知らない人と結婚させられちゃうのかな……」

頭を抱えながら救いを求めてみゆきに目を向けると――

みゆきは頬杖をついて、それもなぜだか満面の笑みで、私のことをじっと見つめていた。なんだか、嬉しそう……？

「そう言うと思ってね――」

ポカンと見つめ返していると、みゆきは待っていましたと言わんばかりに微笑んで、高級ブランドバッグから一枚の華やかなハガキを取り出す。

「――これ。一緒に参加しない？」

少しだけ不安を覚えながらも、手渡されたハガキを受け取る。

そして、目にした瞬間、息が止まった。

な、なに、これは……!?

お母さんの誕生日の一週間前、一ヶ月後の三月上旬。場所はシンガポール。

『男性年収三千万円以上限定の婚活パーティー』

『ハイスベックなダーリンとの出会いはここから』

『高級リゾートホテル「グランツ・ハピネス」の一夜』

こ、婚活パーティー……!?

魅力的かつ怪しげなワードが、案内状に並べられているではないか!

詳細に目を通したあと、ぶるぶると首を振って、みゆきの大きな胸にハガキを押しつけた。

「こ、こんなすごいパーティーに行くなんて、無理だよ……。無理!」

グランツ・ハピネスといえば、中には一泊一千万以上の部屋があるといわれているセレブ御用達のホテルだ。

場違いだし! お金持ちって高圧的な男性しかいなそうだし! 一般人が対象みたいだけれど、私には参加費も高すぎるし! 無理!

「それに、一緒って……みゆきには陵介くんがいるじゃない」

彼女の左手の薬指に輝く婚約指輪に、ジロリと視線を送る。

「咲笑、安心して。これはグランツ・ハピネスのリニューアルオープンに合わせて、陵介の会社がやるイベントなの」

私の反応が予想通りだったのか、みゆきはクスクス笑いだす。

「へ……?」

一瞬にして肩の力が抜けた。

向坂陵介くんは、イベント会社の社長で、五年の交際を経てみゆきと結ばれた彼女の

婚約者だ。イケメンなのに優しく、みゆきの友人である私にも気を配ってくれる、信頼できる人。

「そうだとしても、なんで婚活パーティーのハガキを私に……」

「あまり大きな声じゃ言えないけど……陵介と、さくらをやることになっているの」私にだけ聞こえるくらいの声量で、彼女はイベントについて教えてくれた。

「これは大道寺グループから依頼された、グランツのリニューアルオープンの宣伝イベントで、陵介の会社としても外せないのよ。だから、少しでも盛り上げるために、今回私たちが紛れることになったの」

経緯を聞いてホッとしつつも、今度は別のところに驚愕する。

——大道寺グループ!?

大道寺グループは、高級ホテル『グランツ・ハピネス』をはじめとする世界各地でホテルやリゾート、そして不動産業を展開している国際的な大企業だ。

世界でも五本指に入るほどの売上高を誇るそこは、いわば、日本のホテル業界の王座にあるとも言えるだろう。

ホテル業界に詳しくない私でさえ、その名前はよく知っている。

みゆきの話によると、陵介くんはグランツ・ハピネス事業のCEOでもある大道寺グループの御曹司と昔からの友人らしい。そこで今回、イベントの依頼があったという。

男性側は陵介くんや大道寺さんの人脈で集め、女性側は参加者を広く募集し、厳正な審査の上運営側で決めるとか。いずれも日本人が対象とのこと。

参加者への配慮からメディアや雑誌記者は入れない。『さくら』を入れるのは、女性参加者たちにSNSでリニューアルしたホテルを宣伝してもらうためだろう。

いずれにしても徹底的にプライバシーが守られ、そして信用できる。非常に好感度の高い内容だった。

「——だから安全だし、メディアに取り上げられたり、世間に公開されたりする心配もないの。それも、相手はほとんどが陵介の知人だし。咲笑が新しい出会いを求めるならどうかな？　って思って、この話を持ってきたのよ」

参加男性たちの資産が桁違いなのは気になるが、信頼できる陵介くんやみゆきを介して出会えるなんて、願ってもない好条件だ。

そして、なによりこの状況。追い詰められた私に救いの手が差し伸べられたようにしか思えない。

「どう？　一緒に行かない？　おばさんに破局の報告をする前に、婚活パーティーで新しい相手を見つけたら万々歳じゃない？」

さつきは、無理！　なんて言っちゃったけれど。魅力的な内容と的確な誘い文句。心の天秤は大きく揺れっぱなしだ。

人見知りの私が、そんなところに行くにはかなりの勇気がある。けれども、自分の意思を無視してお見合い話を進められるのはもつと嫌だ。

「失恋の傷を癒すには、新しい恋が一番。咲笑のことを待っている運命の男性、私はいと思うよ。もちろん費用は陵介持ちよ？」

なんてさらにたたみかけてくる。

運命の人なんて大げさすぎ……なんて思いつつも。

ふと、終業後に見た、トモキと後輩の寄り添う姿が頭をよぎる。ズキッと心が大きく痛んだ。

なによ、あんなに鼻の下伸ばしちゃって。私にはこしばらくあんな顔見せなかったくせに。

私も、好きになった人と幸せになりたいな。次はちゃんと、大切にしてくれる素敵な男性とお付き合いたい……

グラグラ揺れていた天秤は、やがて参加するほうに大きく傾いて……

「……ありがとう。なら、行ってみようかな」

シンガポールで新しい恋を探すのも、悪くない……よね？

行動しなければなにもはじまらない。じっとしていても、未来は変わらない。

そう告げるとみゆきは「そうこなくっちゃ」と嬉しそうにグラスを寄せてくる。

カチン、景気のいい音が、新たな門出を祝福してくれた。



——そして、一ヶ月後、三月初旬。

月末で退職した私は、どうにか有給をもち取ったみゆきとともに、シンガポールのセントラルエリアにある、ホテル『グランツ・ハピネス』にやってきた。

イベント参加のみのツアーのため、一泊三日という弾丸旅行になってしまったけれど、みゆきとの旅行は久々だ。目的を除けば、私は眠れないほど楽しみだった。

「……うわあ、テレビで見えていた以上だ。まさか、本当にグランツに来られるなんて……。別世界だね」

「うんうん、セレブって感じ。圧倒されるわね」

ラグジュアリーホテルならではの格式の高いエレガントなロビーには、オーブン前にもかかわらず人がちらほら見える。私たちみたいなイベント参加者や関係者だろうか。

入口のパンフレットによると、五十階建てのホテル内にハイブランドショップ、高級レストラン、リゾートプール。それだけでなく、高層階には新設された映画館や政府公認のカジノまであるらしい。

日本では考えられない、壮大なスケールに胸が躍る。海外旅行や出張は何度も経験したけれど、こんなにラグジュアリーなホテルは初めてだ。

「こんな豪華な旅行、本当にいいのかな」

「いいのよ。陵介も私も咲笑が来てくれて、本当に助かってるんだから」

夢心地で赤い絨毯を踏みしめる私を見て、お嬢様のみゆきは「まだ言ってるの」とからかう。一般人の私からすれば大事なおおこところ、結局のところ、陵介くんの厚意によって、旅費や参加費をすべておごってもらうことになった。

さすがに高額なので、後日みゆきと三人で食事した席で費用を支払おうとしたのだけれど『これくらい気にしないでよ。咲笑ちゃんに参加してもらって助かってるんだ』なんて言って頑なに受け取ってくれなかった。

それどころか『新しい出合いを見つけておいで』なんて気遣ってくれたのだ。

陵介くんには本当に頭が上がらない。

新しい出合い……。か。

ふと、退職の日まで一言も話すことのなかった、幸せそうなトモキの横顔が頭をよぎる。過去が霞むくらいに、素敵な出合いがあるといいんだけれど——



午後三時。早めにチェックインを済ませ、洗練されたホテルエに部屋まで案内してもらう。

あてがわれたツインルームは、シンガポールの美しい夜景を連想させる、シックなカラーを基調としたエレガントな客室だった。

「暑い！ 暑いー！」なんて言いながら、空港でお揃いで購入した軽やかなワンピースに着替える私たち。同じ三月でも日本に比べてこっちはジメジメと蒸し暑い。

お城の一室みたいな客室に興奮したり、持ち寄った私服を見せ合ったり。そんなふうになきゃあきやあしながら過ごしていると、三十分ほどしてインターホンが鳴った。

「みゆき、咲笑ちゃん、お疲れ様」

約束していた陵介くん。チャングン国際空港に降り立ったときに、『ふたりに渡したものがあ』と連絡をくれていた。

彼は三つ揃いのスーツをきっちり着こなしていたが、目鼻立ちのはっきりした端正な顔には汗が浮かんでいる。

嬉しそうに駆けつけたみゆきが、絶景の見渡せる明るいリビングルームに彼を案内し

て、三人で大理石のテーブルを囲む。

「時間を取らせてごめんね。今夜のパーティーの受付は、もう俺のほうでさせてもらったから、これを渡しにきたんだ」

陵介くんは急いでいるのか、挨拶もそこそこにスーツのポケットからクリアのパスケースを取り出して、みゆきと私に手渡した。

なんだろう？

手に取って眺める。首から下げる形のそれには、少し前に自分たちで書いた簡単なプロフィールと、大きなナンバーカードが挟まれている。

——『7』だ。

「陵介くん、この番号は……？」

「その番号でグループ分けしてあるんだ。パーティーでは名刺のようなものだから、忘れずに持ってきてね」

「わかった」と答え、受け取った番号をぼんやり眺める。

なるほど、これでプライバシーが守られるってことか。番号を使えば、名前を読み上げる必要もない。それに、参加者を番号と紐付けることで運営側が管理しやすい。

陵介くんはそれだけ伝えると、「また今夜」と慌ただしく部屋を出て行こうとする。

みゆきもサッと立ち上がり、見送りに行く。

今夜か……

やばい。ど、どうしよう。なんだか緊張してきた。

いざこうしてプロフィールカードを前にすると、現実味を帯びてきて、どうしようもなくばっくん、ばっくん心臓が早鐘を打つ。

私、大丈夫かな……



「——咲笑、ガチガチよ？　大丈夫？」

——約三時間後。会場となるリゾートプールそばのラウンジへ向かう最中。クスクス笑いながら、黒のマーメイドドレス姿のみゆきが顔を覗き込んでくる。

「ああ、うん……。なんか、す、すごく緊張してきた」

お相手が富豪ばかりだからか、今夜のパーティーは盛装がマナーらしい。

陵介さんの去ったあとは、ホテル内のエステやショッピングを楽しんで、うちにあった中で一番お高い、シックなワインレッドのイブニングドレスに着替えた。

予約していたホテル内のスタイリストさんに、素っ気ないボブヘアを巻いてサイドに白の花飾りを乗せてもらって、素朴な顔には華やかなパーティーメイクを施しても

らった。

『わあ！　すごーくきれい！』

なんてはしゃいでごまかしていたけれども、会場が近づくにつれて足取りが重くなる。「大丈夫よ。今まで国際事業部でいろんな国の人とやりとりしてきたんだから。自信持つて」

「それは仕事だったし……」

国際事業部の仕事は、T & Yの海外の顧客や支社とのやりとりが主だった。電話対応が多かったけれど、トラブル時には支社に出向くこともあった。だから語学と応対力については自信があるけれども……でも、今回は仕事ではない。みんな出会いを求めているわけで。それも相手は大富豪でしょ？　慣れていない相手と、なにを話せばいいかわからない。

私は外見通り、口下手なのだ……

「とにかく、ほとんどが陵介の知人だから安心して？　婚活パーティーとはいえ無理に話すことはないわ。私も近くにいるから大丈夫」

「うーん……」

自信なさげにうつむいた、その瞬間。

「……おばさんの持つてくるお見合い、したくないでしょ？」

みゆきが丁寧ながらも鋭い声で一番痛いところを突いてくる。
 そうだ！ と背筋を伸ばす私。

ここで頑張らないと、母が見合い話を持ってきてしまう。

みゆきに煽られるようにして、私は会場となるリゾートプールそばのラウンジへ足を踏み入れた。

開催二十分前の、午後五時四十分。受付で貴重品を預けて、カードを首からぶら下げてラウンジに入る。

十分前から開場している広いラウンジ内では、すでに多くの参加者が談笑していた。高い天井。連なる大きなシャンデリア。ラウンジというより、ダンスホールといったほうが近いほどきらびやかな空間。

等間隔に設置された立食テーブルには、有名ブランドの食器に載せられた彩り豊かな料理が次々と並ぶ。

「思ったより人多いわねー。会場も華やか……って、咲笑、大丈夫？」

「——えっ？ あ、うん」

いけない。想像を絶する規模と豪華さに圧倒され、口から魂が抜けかけていた。上質なスーツに身を包む男性陣に、お姫様みたいに着飾った女性たち。

いくらプロの手で着飾ったとはいえ、私みたいな一般人の……それも野暮^{やぼ}つたいのが紛れ込むのは良くないんじゃないの？ と思っちゃう。

明らかに場違いだつてば！

この人たちと交流を持つことを想像すると、すぐにでも会場から逃げ出したい……そう思いかけて、慌てて頭を振る。

——ダメダメ！ なののためにここに来たの。

早くもくじけそうになる自らを叱咤しながら、みゆきとともにラウンジの奥へ突き進む。

そんなふうにして会場を一回りし、開始まであと十分ほどになった頃、ウェイターさんからシャンパンのおかわりを受け取る。そしてモデルのように颯爽^{さつそう}と隣を歩いているはずのみゆきに、「はい」とグラスを差し出した。

——のだが、あれ……？

待っていても受け取った気配がないので、「みゆき？」と彼女がいるはずの方向へ視線を向ける。

しかし、つい先程まで会話をしていた彼女の姿はそこにはなかった。

ラウンジ内を見渡すと、数歩後方で立ち止まっている彼女を確認した。

みゆきは私の視線に気づかず、ある一点を見つめたままだ。

— あれは……

視線の先には、ついさつき会場入りした陵介くん。彼の周りには綺麗な女性が五、六人いる。

いつも自信に満ちた、魅力的な猫のような大きなみゆきの目にどんよりと陰が落ちている。

彼女が今なにを考えているのか手に取るようにわかってしまう。

私の胸までズキンと痛んだ。

「みゆき……？」

咄嗟に声をかけてしまった。私の声で我に返った彼女は、すぐに笑顔を作る。

「あー、ごめん、もしかして声かけてた？　なんかぼーっとしてたみたいで」

陵介くんが、チラチラこっちにSOSのサインを出しているような気がするけれども、みゆきは背を向けてしまう。

「やっぱり会場がグラントツでだけでゴージャスよねえ」なんて取り繕いながら私より前を歩き、無理矢理世間話をはじめた。

「さくら」である自分たちの立場を気にして無視しているのかな？　と違って、相槌を重ねていたけれど、たぶん違う。私を氣遣っているんだ。無意識なのだろうけど、彼女の目はたまに陵介くんを追っているもの。

みゆきは昔からそうだ。自分こそ甘えたがりのくせに、『私に任せなさい！』と氣弱な私のことを守ろうとする。

でも、こういうときくらいは、ちゃんと甘えてほしい。大好きな彼女が、陵介くんを大好きなことは、誰よりも知っているんだから。

「みゆき」

ペラペラと話を続ける彼女に、シャンパンをぐいっと押し付け、話をやめさせる。繊細なカットの入った見るからに高そうなグラスであることに気づき、ギョツとしそうになったが、努めてみゆきを強く見据えた。

「咲笑……？」

「みゆき、私は大丈夫だから、行っておいで」

「え？」

本当はものすごく心細いけれど、自分のぶんのシャンパンを傾けて、余裕さをアピールしてみせる。どのみち婚活パーティーがはじまれば、みゆきの後ろで縮こまっているわけにはいかないのだ。

「私は私で美味しい料理でも食べて楽しんでるから。夜も陵介くんの部屋でこゆつくり……ふふっ」

元より、夜はひとりでナイトプールを楽しむと思って水着を持ってきた。仕事

で忙しいふたりはなかなか会えないんだから、私に構わず仲良く過ごしてもらいたい。

「咲笑……」

「ほら、行つておいで。早くしないと、綺麗なお姉さんたちに取られちゃうよ？」

「でも……」と渋る彼女の背中を押して「ほら、早く！」と煽る。

何度かそれを繰り返すと、やがて苦笑いしたみゆきは「ありがとう」と遠慮がちに陵介くんのもとに向かった。

……うん、良かった。大好きなふたりには、笑顔でいてもらいたいもんね。安堵してみゆきの背中を見送る。

「——優しいんだね」

そのとき、艶のある低い声に話しかけられた。

ハッとして顔を上げる。

——だれ……？

柔らかなそうなダークブラウンのマッシュヘア、大きなアーモンドアイにキリッとした眉。そして、スッと通った鼻筋。女性と見間違うほど綺麗な顔立ちだ。

身長は百八十をゆうに超えているだろうか。光沢のある上質なネイビーのストライプのスーツに、シルバーのアスコットタイ。トモキよりも遥かに大きく、女性の平均身長程度の私を見下ろすほどの高身長だ。

無意識にポーツと見惚れる。

「——いきなり失礼。陵介には世話になっていてね。偶然にも君の心遣いを目にして、声をかけずにはいられなかったんだ」

会話を始めたみゆきたちに視線を配り、我に返った私を見て、ニコリと上品な笑みを浮かべる。まるで、スクリーンから出てきた王子様のような人だ。

「さつきから助けてほしいような顔でこっちを見ていたから、きつと喜ぶと思うよ」

優しい声色。どうやら彼も陵介くんと親しいらしい。緊張しつつも少しだけ警戒心が解ける。

「……お知り合い、なんですね。ふたりにはいつもお世話になっているので、喜んでくれるなら良かったです」

「とても友達思いなんだね」

優しいに細められた色素の薄い瞳に見つめられ、全身が甘く震える。

ここにいるということは、おそらく経営者や大企業役員なのだろう。しかし、振る舞いにも口調にも品があつて、周囲より頭一つ抜け出ているよう。

甘いマスクのせいだろうか。

トクン、トクンと鼓動が自然と高鳴る。

「——あのお、すみませんー！」

そのとき。ポーツとしている私の前に、数名の女性がきゃあきゃあ言いながら体を滑らせ、会話に加わってきた。

その瞬間、我に返る。

そっか、こんな素敵な男性を放っておく人はいないよね。

もう少し話をしたい気もしたけれど。私は赤く染まった顔を隠すように頭を下げて、その場をあとにする。

彼がこちらを見ていたことも知らずに。



——約三十分後。

ラウンジを出てすぐの、中庭に隣接するリゾートプール。誰もいないプールサイドに伸びるデッキの隅っこに腰を下ろした私は、ライトアップされた揺らめく水面を眺めていた。

無人のプールサイドは、まるでパーティー会場とは別世界のように静かだ。

——結局、あれから会場の熱気に圧倒されて、三十分もしないうちにコソコソ出てきてしまった。せつかくみゆきと陵介くんが連れてきてくれたのに。

はあ……と特大のため息をこぼしながら、膝を抱え直す。

どうにかここで探さないと、帰国後母にロックオンされるのがわかってるのに、なんでうまくできないんだろう。

こんな引く手数多な男性たちの中から探そうなんていうのが、甘い考えなのかなあ。

深いため息が止まらない。

胸に顎がくつくほどの勢いでうなだれていると、トモキの言葉が脳裏をよぎる。

『咲笑って大人しいよなあ。オレ、明るい子のほうが好きなんだけど』

そう言われたのは、付き合ってすぐの頃だっけ。

引っ込み思案で、思ったことをあまり口にできない私。そんな自分が好きなわけではないけれども、性格というものはなかなか直せないものだ。

それすらも理解して付き合ってくれたのかと思っただけで、きつと彼は違ったのだらう。

だからあの頃、ちよつとでも変われたら、と思っただけ髪を切ってカラーリングをしてみたり、メイクをみゆきに教えてもらったりした。

でも、明るくなったのは外見だけで、中身は引っ込み思案で気弱なままだ。

こんななんでもん、明るくて輪の中心にいるようなトモキとなんて合うわけがないよね。こうなるのは当たり前のことだったのかもしれない。

はあ……

——つてダメダメ。トモキのこと考えて、どうするの！ 次の恋に行くために、ここまできたのに！

次は、私のことを大切にしてくれる人とお付き合いして、幸せになるんだから。

優しく、穏やかで、紳士的で……

そう心でつぶやいた瞬間、ふとさつき会場でやりとりをした、綺麗な男性がぼんやり脳裏に浮かぶ。

誠実そうで、まさに理想通りの人だった。言葉を交わしたのは一瞬だったのに、あの優しい笑顔が瞼の裏に焼き付いて離れない。

あんな素敵な男性と結ばれたら、これ以上のことはないだろうな……

——まあ、婚活パーティーから逃げてきた私に、そんな都合のいい話があるわけがないね。

そうやって、何度目かのため息をこぼした、そのとき。

「——ここにいたんだ」

静かなりゾートプールに響いた声に、ひえっ！ と私は飛び上がった。

声のほうに顔を向けると、なんと、今まさに思い浮かべていた人物が立っていた。柔らかそうな髪を揺らし、ヒラヒラと手を振りながらこちらに駆け寄ってくるではないか。

「——え」

混乱のあまり、短く声が漏れる。

「ああ、良かった、部屋に戻っていたらどうしようかと」

だけど彼は、そんな私に構わず、安堵した様子で片膝をついて側に腰をおろす。

どうして私を捜しているのか理解できず、王子様のように美麗な彼をボーッと見上げた。

しかし、見惚れている場合ではない！ すぐに頭を切り替え慌てて口を開く。

「わ、私……ですか？」

「そうだよ。君、7のナンバーカードを持ってないか？」

そう言いながら、彼は首に下げていたパスケースを、スーツの胸ポケットから覗かせて私に尋ねる。大きく書かれている数字は『7』だ。

つられて私のほうも理解できないまま、首に下げていたパスケースを見せる。

「はい、そうです……」

まるで、病院の待ち合い室のような、おかしなやり取り。しかし、彼は安堵したようにスーツの胸ポケットにケースをしまい、ニコリと微笑む。

「——やっぱり。今、イベントミッションがはじまって、まずは同じナンバーの人とファーストコンタクトを取ってくれという指示があったんだ。俺にだけパートナーが現

れなくてね。さっき、君が外へ出ていくのが見えたから、もしかしたらと思って……」
まさか見られていたなんて。彼みたいに素敵な人なら、相手なんて選り取り見取りだろうに……。わざわざ私のことを捜してくれたんだ。とても真面目な人らしい。胸が甘く痛みだす。

「すみません……なんだかひとりでしたら場違いな気がしてしまって……圧倒されたというか」

正直に謝罪すると、彼は「謝らないで」と微笑み、少しだけ距離を置いて隣に腰を下ろす。「君と話したいなと思って来たのであって、咎めるつもりなんてさらさらない」

その言葉に図らずも彼を見上げる。ぱちりと目が合うと、彼は優しくにふんわりと微笑む。トクトクと心臓が早鐘を打つ。

どうということ？ 話したいな って……つまり私に会いに来たってこと？

「——名前、教えてくれる？」

彼は本当に会場に戻るつもりはないようで、当たり前のように尋ねてきた。

「え？ 咲笑……です。小道、咲笑」

ドキドキしながらも、自然なやり取りに言葉が引き出されてしまう。とても不思議な人だ。

もしかして、さっき言っていた、会場で行う予定の「ファーストなんたら」をここで

行おうとしているんだろうか？

「咲笑、か。——なら、咲笑、今日はどうしてこのパーティーに？」

わっ。いきなり呼び捨てされてしまった。

ドギマギしつつも優しい声に促されるように、また素直に質問の答えを考える。

やっぱりここで、「ファーストなんたら」をしようとしてほしい。

「えっと……今日は、みゆきが……い、いえ友人が、恋人と別れた私を励まそうとして——」

つい、そこまで言って、ハッと口を押さえる。

失恋したから婚活しているだなんて伝えたら非常識だろうか。失礼だと怒られるかもしれない。

しかし、私の心配をよそに、隣からはクスクスと笑い声が聞こえてきた。

「気にしなくていい。ありのままに話してほしい。俺は、君のことが知りたいと思って質問してるから」

さっきも見せてくれたふんわりとした笑顔に、また見惚れる。

私のことが知りたい……？ 夢みたいなセリフだ。どうしよう、胸が高鳴る。

「歳はいくつなの？」

「に、……二十五です」

「なら、俺の六つ下だね。俺は三十一。ちなみに名前は、『優しい』って書いて『ずる』——優さん。

物腰が柔かくて自然体。だけどころちゃんと私の求める距離感を保ってくれる。とても魅力的な男性。初対面なのにこんなに気兼ねせずに会話ができるのは初めてだ。

その後も色んな質問をされた。職業とか。趣味とか。もちろん彼の職業も教えてくれた。

洗練された風貌からなんとなく察していたが、彼は企業経営者らしい。

お父様が大きな会社の代表で、現在動かしているのは自分と弟さんだと教えてくれた。私も事情により、退職し求職中であると告げた。

肩書きや人柄はもちろん、こんなに眉目秀麗^{びもくしうれい}だなんて……。何度も彼の整った顔をチラチラ覗き見てしまった。

「——でも、……なんで恋人と別れたの？」

そんなふうにしていくつもの質問を重ね、私の肩の力が抜けた頃。さり気なく、けれども心底不思議だとも言いたげに、そんな質問が投げられた。

反射的に端整な顔を見上げる。視線が絡まると、彼の表情がすかに揺れたような気がした。

「不躰^{ふたけ}な質問をして申し訳ない。こんなに素直でいい子なのに、なんでだろうと考えて

しまつてね。さつきも、なんだか思い詰めたような顔をしていたし……」

会場でもそうだったが、彼はとても人のことを見ているらしい。

「良かったら、聞かせてくれないかな？」

褒め上手な彼の、ひどく優しい声に心が綻^{ほころ}んでいた。

ぼつりぼつりと、トモキとの別れからこのパーティーの参加に至るまでを掻い摘んで話す。

本当だったら、知り合って間もない男性に身の上話をするなんて考えられない。

けれども。この日限りだと思つて気が緩んだのか。はたまた、彼にほだされたのか。

話していくうちに、心優しい彼に縋^{すが}りつきたくなった。

ずっと静かに耳を傾けてくれた優さんは、話し終えると労^{いたわ}るようにボンと私の頭に触れた。

温かくて大きな手だ。

「つまり……同僚の恋人と別れた上に、ご家族に無理矢理縁談を勧められそうなのわけ。職場も辞めてしまったと」

「はい。だからその前に自分の意志で相手を見つけないと思つたんですが……さつきも言つたように咄嗟に会場を出てきちゃつて」

「人が多いから圧倒されたんだな。俺も人前はあまり得意ではないからわかるよ」

さり気ない心遣いにじわりと目の奥が熱くなる。やっぱり彼は第一印象で感じた通り、理想通りの素敵な男性だ。

そんな人にこうして長話を聞いてもらえるなんて……

これは、神様が与えてくれた、独身最後の甘いひとときなのかもしれない。

……とはいえ、彼の優しさについてまでも甘えているわけにはいかない。長く引き止めるのは、可哀想だ。

「いろいろな愚痴ぐちってしまい、すみません。幸せになりたいだけなのに、なんだか難しいものですね」

少しだけ惜しみながらも、話を終わらせようとしたその瞬間、膝の上に置いていた手に、大きな手が重なった。

え……？ 予想外のことに息が止まる。

「——なら、ちょっとだけ俺に付き合わない？」

優さんの切れ長のアーモンドアイが魅力的なカーブを描く。

「え？」

どう、いうこと？

「抜け出そう、ふたりで」

「ぬ、抜け出す？ わあ、ちょ、ちょっと……」

指を絡められて、手をぐいっと引かれた。

彼はおとぎ話の王子様のように優雅に微笑み、リゾートプールから私を連れ出したのだった。

第二章 花火とプロポーズと利害一致婚と

「あの、優さん、どこに行くんですか？」

「さあ、どこだろうね」

手を引かれたまま、館内のエレベーターに乗る。その仕草はとてもスマートなもの、ラウンジではまだ婚活パーティーの最中だ。

「会場に戻ったほうがいいのでは？」と何度も声をかけたが「せっかく来てくれたんだから楽しんでもらいたい」と、よくわからない誘い文句で制されてしまった。

つい一ヶ月前は、初めての失恋に涙していたのに、なぜか今は見目麗しい素敵な男性に誘われて、パーティーからコッソリ抜け出している。

後ろめたさを感じつつも、なんだか夢を見ているみたいで高揚してしまう。

やがてエレベーターの上昇感が止み、扉が開く。そうして目の前に広がった光景に、

思わず「うわあっ」と声を上げてしまった。

ドーム型の大きなフロアに見えたのは、豪華なシャンデリア。スロットマシン、ルーレット。まるで映画の世界に入り込んだような興奮と、テーマパークのような豪華絢爛さがビリビリ肌に伝わってきた。

カジノだ！ 初めて見た……！

オープン前なのに、ドレスアップしたハリウッドスターのような人たちが各コーナーを楽しんでいる姿が見える。もしかしたら、特別な宿泊者にのみ開放しているのだろうか。啞然^{あぜん}としていると、ホテリエの男性が廊下の先からこちらに近づいて来るのが見えた。やけに慌てた様子だ。

男性が頭を下げて口を開く前に、優さんは制するように、スッと右手を上げる。

「――奥の個室、空いていますか？」

男性は背筋を伸ばし畏^{かし}まった様子で、深々と頭を下げる。

「……すぐに、ご案内いたします」

私たちはすぐに、フロアの一室奥にある特別な一室へと通された。

「わあ、すごい綺麗……」

通された個室で、私は歓喜の声を上げてしまった。

ピカピカに磨かれたガラス窓の向こうでは、シンガポールの夜を最も彩るとも言われる、光と水の織りなす野外ショーが繰り広げられている。

「カジノじゃなくて、ホッとした？」

百八十度どこを見ても広がる幻想的な光景に目をキラキラさせていると、隣に並んだ優さんがカクテルグラスを差し出しながら、クスクス笑う。

エレベーターを出たときの、驚いたマヌケ顔を見られていたらしい。ボンッと頬に熱が集まる。

「すみません……その、嫌なわけじゃないんです。あまりにもきらびやかで圧倒されちゃって」

言葉を選びながら正直に伝えていると、優さんはいたずらが成功した子供みたいな、可愛い顔をする。

「驚かせて申し訳ない。一週間前からカジノフロアだけ先行でオープンしてるんだ。普段はここもカジノのVIPルームとして使用しているんだが。ショーが一番綺麗に見えるからさ」

促され背後を見ると、ゲームテーブルやルーレット、革張りの大きなソファが存在感を放っている。

言う通りカジノの上客の部屋のようなのだ。

「ここによく来られるんですか？」

「まあ……そうだな。ギャンプルはやらないんだが」

「——え？」

——やらないのにな？

「ほら、そろそろ一番いいところだから、目をそらさないほうがいい」

優さんが私の肩に触れて、外を見るように促す。

なんだかはぐらかされたような気がしたもの、感じる体温と、耳に触れる吐息に一気に意識が集中する。

「もうすぐだから、見ててね」なんてさらに後ろから低く囁かれてしまつて。ぱつくん、ぱつくん心臓が暴れまくる。

だめ、近すぎる。こんなのドキドキして耐えられない。

そう思った数秒後、「ビュー」という甲高い音がして意識が流れた。

そして次の瞬間、ドドドとお腹の奥底に響く音とともに、次々と、ガラスの向こう側で花火が上がりはじめる。

「花火！　こんなに近くで!？」

「綺麗だな……。これが本日のこのショーの一番の見どころ。リニューアルを記念して、花火は今日から打ち上げられるらしいよ」

「こんなに近くから花火を見たのは初めてです！　光も重なって、なんだか花火の中にいるみたい！」

「花火は好きなんだ？」

「はい！　とっても好きです！」

その瞬間、照明を落とした静かな部屋に静寂が訪れる。

——　とっても好きです！　という声が部屋の中で反響した途端、優さんが隣で、ふふつと息を漏らした。

は、恥ずかしすぎる。なんだか告白してるみたいじゃない。

「……すみません。さっきからはしゃいで、興奮しすぎですよ……」

「そんなことない。君に喜んでもらいたいと思っていたから、可愛い笑顔が見られて嬉しいよ。元気が出てきたようで、良かった」

ドキリツと胸が大きく音を立てた。笑顔の優さんと視線が重なる。

可愛いって……

もしかして、励ますためにここまで連れてきてくれたの？

心の中で問いかねながら、再び花火に向けられた中性的な横顔をそっと見つめる。

初対面なのに根気強く愚痴を聞いてくれて、元気づけようと、温かい手でここまで優

しく導いてくれた優さん。

たまたま同じ『7』番を持っていただけの私に、夢のようなひとときを与えてくれた。シンガポールの美しい夜景と、王子様のような素敵な男性。こんな輝かしい夜は、もう二度と訪れないだろう……

ふと、帰国後のことを思い出す。

お見合い……したくないな。

鮮やかに色づいた心が、黒の絵の具で塗りつぶされるような悲しい気分になる。

このまま時間が止まってしまえばいいのに。

そうこうしているうちに、花火は一層盛り上がりを見せる。もう、フィナーレの時間だ。ちらりと腕時計に視線を落とす。時刻は午後九時を指そうとしていた。

そろそろ婚活パーティーも、シヨーもお開きの時間。

そして、私たちも……サヨナラの時間だ。

痛む胸の内を見ないようにしながら、慌ててバッグの中のスマートフォンを探る。

みゆきにそろそろ連絡を入れなきゃ。

急にいなくなつて心配しているであろうみゆきに、『リゾートプールに行く』とのメッセージを送る。

嘘にならないように、このあと行けばいいよね……

「——咲笑」

スマートフォンをバッグにしまったとき、声が掛かる。顔を上げると、優さんがなんとも言えない表情でこちらを見下ろしていた。

シヨーはいつの間にか終わりを迎え、窓の外にはビル群が彩る人工的な夜景が広がっている。

「——はい」

胸がギュッと締め付けられて痛い。

優さんの顔を見ていられずにうつむいたその瞬間、彼は私の肩に両手を置き、正面から向かい合うような形で視線を合わせてきた。

「君の結婚相手、俺ではだめかな？」

「え……？」

唐突すぎて、理解するまでに時間がかかった。

すると、優さんは私の手を取り、優しく握り直すと、今度はゆっくり口にする。

「俺も今、結婚相手を探している。だから、咲笑。君さえ良ければ、俺と結婚してほしい」
こ、これは現実だろうか？

もちろん婚活パーティーに参加していたんだから、おかしくはない。ないんだけれど……。優さんみたいに、誰もが憧れるような人からプロポーズされるなんて……

信じられない一方、トクトクと胸が甘く高鳴りはじめる。そして彼は、スーツの胸ポケットからイベント用のパスケースを取り出して、私の手の上にそっと乗せた。

「黙っていて、申し訳ないが——」と添えて。

なんで謝るのだろう。言葉の深い意味を考える間もなく、挿入されていた名刺に視線を落とした瞬間、息が止まった。

【大道寺グループ リゾート＆ハウジングホールディングス 取締役副社長兼ホテル事業CEO】

【大道寺優】

大道寺……？ 嘘でしょう!?

舞い上がりにかけていた気持ちが、一気に冷静さを取り戻していく。



「……名乗るのが遅れてごめんね。プライベートで名乗ると驚かれることが多くてね。せっかく打ち解けた君が身構えそうな気がして、ためらったんだ」

「――」

申し訳なさそうな姿に思わずキュンとしたけれども、『そんなことはありません』とは言えなかった。

ショーが終わったこともあり、VIPルームの一角にあるリラクゼーションスペースへ移動して、彼が手配してくれた軽食を挟んで向かい合う私たち。

まさか、優さんが、このグランツ・ハピネスのCEO……

それどころか大道寺グループの副社長だなんて……

経営者とは聞いていたけれども、規格外の大物だったので驚かずにはいられない。

でも、確かに言われてみればいくつか思い当たる節がある。

ホテリエさんへの対応も。ギャンブルをやらないのにカジノに出入りしていることも。今日からはじまる花火ショーに詳しいことも……

確かに納得することばかりだが、今はそんなことを思い出している場合ではない。

「なぜ、私と結婚をしようなんて……？」

そんな引く手数多の御曹司が、私みたいな冴えない一般人にいきなりプロポーズだなんて。いくら婚活パーティーの参加者とはいえ、なにかの間違いじゃないだろうか？

おそろのおそろの問いかけると、彼は先ほど手配したワインを何度か傾けたあと、ゆっくりと話をはじめ。

「君は、うちのグランツ・ハピネスが百周年になることを知ってるかな？」

突然話題が変わり首を傾げつつも、とりあえず彼の目を見てこくと頷く。

「はい、それは、もちろんです」

今年で彼のホテル、『グランツ・ハピネス』が創業百周年を迎えることは、テレビや雑誌などでも騒がれている。

記念パーティーをはじめ、無料ご招待やら記念イベントやらが行われるとか書いてあったっけ。

「その創業パーティーが二ヶ月後に行われるんだけど、それまでにどうにか相手を見つけるようにと、厳命されていてね」

ため息混じりの口ぶりから、彼がなにを言いたいのかを察した。

つまり――

「ご両親からですか……」

「ああ」

頷いて、彼は続ける。

「創業パーティーはCEO就任以来のビッグイベントで、メディアに取り上げられることが予想される。だから、両親が『この年になっても未婚の跡継ぎなんて恥ずかしい』と山積みの釣書から早急に相手を選ぶように催促してくるんだ。だが……俺は、身内が介入する、煩わしい結婚はしたくなくてね……ずっと逃げてきたんだが、そうはいかな

立ち読みサンプル はここまで

くなってしまった」

相槌を打ちながら、記憶を遡る。

私の記憶だと、グランツ・ハピネスグループのCEOが代がわりしたのは三年前。

当時の大道寺グループの社長――つまり優さんのお父様が、ホテル事業を優秀な息子さんに一任することにしたという決断が話題になっていた。その時の報道では、顔写真などとは出ていなかったから、優さんのことはわからなかったけれども。

グループ経営の要ともなるホテル事業を任せられるということは、事実上のトップのようなもの。

そんな彼に舞い込む縁談のお相手なんて、とんでもない大企業のご令嬢だろう。それを簡単に袖にする彼の決断力に、驚かざるをえない。

「――そんな経緯があつて、陵介が企画してくれたこのイベントに参加してみたわけだ。あまりこういうのは、得意ではないんだがね……。でも、そうしたら、君と出会えた」

「えっ……」

急に話の矛先が私に向けられて、ぴょこん！と背筋が伸びる。

そう話を締めくくると、アーモンドアイをキラキラ輝かせ、意味ありげな眼差しでじつところらを捉える、優さん。

まるで恋人にでも向けるかのような、とろけるような甘い眼差し。無意識に胸が騒ぎ